

## 「戒め、教訓とするために」

I コリント10:1～12

### ●導入

今日私たちは敗戦記念礼拝を共にささげようとしています。奇しくも私たちは8月15日という日に礼拝をささげようとしていることとなります。8月15日が何の日であるのかわからない子どもたち、若者が急増している。そんな報道をここ10年ぐらいの間に盛んに聞くようになりました。

もちろん76年前の「あの日」を直接体験している人の数は私たちのこの礼拝の中でも、果たして何人いらっしゃるのでしょうか。時間と共に記憶が薄れ、歴史が風化していく。それはいつの時代においても避けられないことなのかもしれません。

けれども私たちは今日もすべてのものを造られた創造主の前にひざまずきたいと思えます。時代を治め、歴史を支配される神の前に進み出たいと思えます。そして、世界の審判者である主の声に耳を傾けて行きたいと思えます。

### ●聖書朗読 I コリント 10:1～12(新改訳 2017)

10:1 兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。

私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通過して行きました。

10:2 そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、

10:3 みな、同じ霊的な食べ物を食べ、

10:4 みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。

彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。

10:5 しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。

10:6 これらのことは、私たちが戒める実例として起こったのです。

彼らが貪ったように、私たちが悪を貪ることのないようにするためです。

10:7 あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように、

偶像礼拝者になってはいけません。

聖書には「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」と書いてあります。

10:8 また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、

淫らなことを行うことのないようにしましょう。

彼らはそれをして一日に二万三千人が倒れて死にました。

- 10:9 また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、  
キリストを試みることをないようにしましょう。彼らは蛇によって滅んでいきました。
- 10:10 また、彼らのうちのある人たちがしたように、不平を言うてはいけません。  
彼らは滅ぼす者によって滅ぼされました。
- 10:11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、  
世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。
- 10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

### ●アンゲラ・メルケル

みなさんは第8代ドイツ連邦共和国首相を務めているアンゲラ・メルケル首相をご存じでしょうか？ドイツ史上初の女性首相となったメルケル首相は、日本でも知名度抜群の政治家の一人として知られています。彼女はドイツのみならずヨーロッパそして世界の指導者として卓越した手腕を発揮してきた政治家であります。

西ドイツに生まれ、東ドイツで育った彼女は牧師である父親を持ち、物理学者であり、政治家であると同時に敬虔な信仰者、クリスチャンでもあります。優れた演説家としても知られるメルケル首相は、これまでもたびたびキリスト教会主催の大会でスピーチを行ってきました。

そんな彼女が1995年、当時環境大臣の職に就いていた時に語ったスピーチの一説を紹介したいと思います。メルケル環境大臣はキリスト者として、次のようなことを述べているのです。

「歴史とは—わたしの理解によれば—すでに起こったたくさんのおもひを、それがわたしたちの前例となるようにしているのです。わたしたちは、その歴史のなかで他の人々がわたしたちの前に過ちを犯し、わたしたちはそこから、自分たちも間違いを起こさうという意識を持って、学ぶべきなのです。これがわたしにとって、心を落ち着かせてくれる聖書のメッセージです。」(1995.6.14ドイツ福音主義教会大会での講演より)

歴史とは何か？すでに起こったたくさんのおもひを示すもの。私たち以前の人々がかつて過ちを犯してしまったことを示すもの。そこから私たちは学ぶべきだとメルケル首相は言います。私たちもまた間違いを起こさうという意識をもって学ぶべきだと言うのです。

今日お読みしましたコリント人への手紙もまた民族の歴史を私たちに指し示しています。パウロはこの手紙の中で神の民イスラエルが犯した過ちを記しています。なぜでしょうか？それはそこから学ぶべき事があるからです。私たちもまた同じ過ちを犯しうる人間だからです。

メルケル首相やパウロのあまりにも大胆な姿勢に驚かされます。愚直なまでの正直さに心を刺されます。過去の挫折や失敗に目を背けたくなるのが私たちです。見たくないものに目をつむりたくなるのが普通の人間です。しかし、だからこそ、そこにこそ私たちの見るべき真実があるのではないのでしょうか。

過去に目を閉ざすのではなく、目を開く事。それこそが、歴史が私たちに指し示すものであります。私たちが目指すべき姿であるということです。

メルケル首相の一つ前の世代の政治家に、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーという人物がおりました。第6代ドイツ連邦大統領を務めた、歴史に名を残す指導者であります。1985年5月8日、ヴァイツゼッカー大統領が連邦議会において「荒れ野の40年」と題する演説を行いました。

8月15日が日本にとって忘れることのできない日であるのと同様に、5月8日はドイツにおいて心に刻むべき日として知られています。すなわちドイツが敗戦を認め降伏した日であり、第二次世界大戦におけるヨーロッパの戦勝記念日でもあります。

その5月8日に、しかも、敗戦からちょうど40年目にあたる1985年の連邦議会においてヴァイツゼッカー大統領は「荒れ野の40年」と題する演説を行ったのです。その演説の中でヴァイツゼッカー大統領は次のようなことを述べているのです。

「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし、過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」

ドイツがかつて、第二次世界大戦において行ったこと。あのナチス政権下で行われた残虐非道な出来事。ホロコーストと呼ばれるユダヤ人への壮絶な迫害のこと。

それらを念頭に置きながらのヴァイツゼッカー大統領の言葉です。決して過去に目を閉ざしてはならないとする言葉です。そして、それは現在において盲目とならないためだと言うのです。みなさんもすでにお気づきだと思います。これは、パウロがコリント人への手紙において述べたことに通じる言葉なのです。

10:11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

ユダヤ人は、よく記憶の民と呼ばれます。民族の歴史を、そして、民族のたどってきた過去の営みを忘れない。忘れることなく心に刻みます。世代から世代へと記憶を受け継ぐのです。

それは何も今に始まったことではありません。ホロコーストという大変な迫害を経験したからだけでもありません。民族の歴史の始まりから、あの旧約聖書に記された時代から、その記録を継承し、また記憶を受け継ぐといえます。

そして、この記憶の継承はユダヤ教徒からキリスト教徒へと改宗したパウロにとっても大変重要な営みであったと言うのです。

パウロが記すのはモーセに導かれた出エジプトの歴史です。奴隷から解放され、あのエジプトから救い出された民族の歴史を思い起こすのです。そこにはイスラエル民族の苦難の足跡が伺い知れる物語があります。大変な苦勞をして40年もの歳月をかけてたどりついた約束の地への道のりが記されます。

ただし、パウロはイスラエルの歴史を美化した形で記そうとはしません。出エジプトの旅を単なる壮大な脱出劇として思い起こそうとはしません。反対にその道のりが、失敗と挫折と裏切りに満ちた罪の歴史であることを正直に述べようとします。

偶像礼拝を行った者、淫らな行いに走った者、そして、不平をつぶやき、滅ぼされた者たちがいたこと。過去の栄光でもなく、苦難を乗り越えた先祖の不屈の精神でもなく、あくまでも神の御前における裏切り、不信、背信の事実をパウロは、隠さず述べようとするのです。

なぜでしょうか？それは過去に目を閉ざす者とならないためです。現在に盲目な者とならないためだと言うのです。「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。」  
そうパウロは言うのです。

## ●教会と国家



来月、9月23日に日本同盟基督教団が、宣教130周年記念大会を行おうとしています。本来であれば教団の諸教会から教職信徒が一堂に会しての大会となるはずでしたが、コロナ禍の影響でオンラインの開催となりました。

ところで、みなさんは同盟教団の始まりとその歴史をご存じでしょうか？今からちょうど130年前。1891年の11月、横浜に15名の宣教師が来日したところから教団の歴史は始まります。そこから大変な苦難と犠牲を伴う日本宣教が繰り広げられたというのが同盟のルーツとなっています。

しかし教団130年の歴史は決して美化されて終わるようなものではありませんでした。戦時下における教団の営みには、ごまかすことも隠すこともできないような大変大きな痛みを伴う現実がありました。

私はもちろん、戦争を知らない世代の一人であります。直接見聞きしたわけでも、自分が体験したわけでもありません。けれども、戦時下における教団がどうであったのか、その時に教会が何をして、何をしなかったのか。それは避けて通れない、向き合わざるを得ない負の歴史の遺産であります。

今から30年前、教団創立100周年を記念して宣言文が出されました。その宣言文には教団の歴史が記されました。先ほど述べた最初の15名の宣教師たちも登場します。それに加えて次のような文章が宣言文には記載されているのです。

**「日本同盟基督教団は、太平洋戦争時に国家神道体制の下で教会の自律性を失い、国策に協力しました。とりわけアジア諸国と、その教会に不当な苦しみを負わせました。その罪を認め、ここに悔い改め、教会のかしらであるイエス・キリストこそ唯一の主権者であることを告白します。」**

戦争という非日常の中で、人が人の命を奪い・奪われるという極限状態の中で、そこで果たして何が起きたのか。いや起こしてしまったのか。この短い宣言文の中にも、そうした負の歴史を、大きな過ちの事実を正直に言い表そうとしているのです。

何のためにそうするのか？それは、戒めのためであり、今を生きる私たちへの教訓とするためにです。この宣言文の中に「国家神道体制」、という言葉が出て来ます。この言葉が持つ意味を私たちは改めて学ぶ必要があると思います。

国家とは何か？国家というものが持つ本質は何か？それは、いつの時代にも真剣に論じるべき大切な課題とされてきた事でもあります。

教会は神によってキリストにおいて、この地上に造られた主の民の集まりです。一方、国家というものは神のしもべとしての役割を担うべく神が定められたものです。それはローマ書13章で「あなたがたに益を与えるための神のしもべ」と呼ばれているとおりなのです。

しかし、教会と国家の関係は、常に歴史上において問われ続けてきた課題です。時に国家は、凶暴な牙をむくものとなりました。教会が国家に利用され、迫害され、服従を要求されたことを歴史は証明しています。

国家が絶対的な力を求め、支配と権力によって教会を踏みにじる事がありました。国家を神とし、国家の指導者を崇拝することを強要したことが確かにありました。教会が国家の言いなりになるという事、国家神道体制の下で教会の自律性を失うという事、それは日本の教会のかつての姿でありました。

私たちは、その事実から目をそらしてはならない事を覚えます。過去に目を閉ざしてはならないことを覚えます。それは今を生きる私たちが盲目とならないためです。歴史に学び、過去の出来事を教訓とすること。それが私たちに求められている事でもあります

#### ●目を覚ましていなさい

10:11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

私が子供の頃、よく祖父から日本軍にいた時の話を聞かされました。私の祖父は、太平洋戦争開戦時に旧満州(現在の中国東北部)におりました。その地で日本軍の兵隊として召集され、軍隊での生活を送ることになります。

祖父が聞かせる話しはいつでも軍隊生活の自慢話ばかりでした。登山訓練をして一番に山に登ったとか、食事を食べるのもいつも一番だった。そんな話しを繰り返し、繰り返し子どもの私に聞かせるのです。

祖父は戦争の悲惨さや戦場の恐ろしさを語ることは一度もありませんでした。おそらく語れなかったのではないかと私は想像するのです。戦争が何を引き起こしたのか、戦場でどんなことが行われたのか。それは、言葉にするのも恐ろしい出来事だったのだろうと思うのです。

戦争が、人を狂わせるのか、それとも、人が戦争を狂わせるのか。正直、分からない、としか言いようがありません。それでも、私たちは戦争という事実から目をそらしては、いけないと思うのです。それは、過去に目を閉ざす者、現在に盲目な者になってしまうからなのです。

みなさん、もう一度この11節をご覧ください。ここに過去と現在と未来が書かれている事がお分かりでしょうか。「これらのことが彼らに起こった事」、そして「それが書かれた事」は過去の出来事を指します。

2 つめに「世の終わりに臨んでいる私たち」が今、現在の私たちを意味する言葉です。さらに3 つめに「戒めのため、教訓とするため」という言葉が、これからの未来のための備えを指しているのです。

8月15日はまさに過去を指す日付です。でも、同時に8月15日から見えてくる現在があり、そして未来があると思うのです。私たちが8月15日という過去をどう見るのか、あるいは見ないのか。

それによって、私たちが今直面している現在の見え方も変わってくるでしょう。そして、これからやってくる未来の姿も違って見えるのではないかと思います。この日本は、そして世界は今、どこに立っているのか。どんな状況の中に置かれているのか。

さらに、これから私たちの世界がどんな未来を迎えていくのか。  
私たちは、これからも過去と現在と未来を見る目を持たなくてはなりません。

医者であり、また神学者でもあったアルベルト・シュヴァイツァーが、  
かつて次のような言葉を述べました。

「いま手を抜いたことを、未来で修復することはできない」。

これは、物事の核心を示す言葉だと思います。

別の人はこのようにも言いました。

「わたしたちが今日すること、しないことが、  
明日世界がどのように見えるかを決定する」

イエス・キリストは、世の終わりについて語られる中で「目を覚ましていなさい」と  
弟子たちに言われました。来年も再来年も、確実に8月15日は巡ってきます。  
私たちが、霊的な目をさまし、私たちが見るべきものを見ることができるよう、  
そのためにこそ、私たちはこの日を心に刻むのです。

今、めぐみ教会は確かに新しい時代へと進んで行こうとしています。

次の世代が、確実に成長し続けています。

果たして、私たちの子どもたち、孫達に私たちは何を残せるのでしょうか？

信仰をもって歴史を正直に見る目、世界とその真実を正直に見る目、  
そして神の約束と神様ご自身から決して目を離さない確かな生き方。  
それを私たちは、次の世代にしっかりと受け継いでいきたいと思うのです。

### ● 祈り

10:11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、  
世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

神様、私たちは今日8月15日を迎えました。76年前のあの日も、暑さの厳しい一日で  
あったと言われます。あの日、日本の歴史がまた世界の歴史が確かに動いたのです。  
日本が戦争に敗れ、戦いの手をもうあげる事ができなくなりました。

第二次世界大戦、そして太平洋戦争で奪われた命は、数千万人を数えると言われます。一人の命が大切である、かけがえのない存在であると私たちは考えます。それなのに戦争という暴力は、想像もできないほどの命を奪い取り、この地上において地獄のようなさまを私たち人類に突き付けたのです。

そして教会もまた、その戦争のさなかに傷つき、変容し、本来の姿ではない姿をさらすことになりました。戦時下における日本の教会の戦争責任。それは今もなおその真実を明らかにすることを現代の教会に問い続けるのです。

今、私たちはこの過去の事実、真実に目を開きます。過去の罪と向き合い、悔い改め祈らずにはいられなくなるのです。その上で、現在何が起きているのか、これから何が起ころうとしているのかを思い巡らします。

聖書は人間の罪を赤裸々に正直に記録し、そして明らかにします。民族の犯した罪、重ねた失敗と裏切りをそのまま後世に伝えようとしています。それは過去に目を閉ざしてはならないからであり、そして、現在において盲目とならないためです。

今を生きる私たちへの戒めのためであり、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためなのです。

過去と向き合い、歴史の事実と直面することは、大変困難なことであります。それでも私たちは勇気をもって、また信仰をもって、これに向き合い続けたいと思います。

その上で今世界が直面している現状とこれから世界が迎える終末の時代とを思い巡らします。どうか私たち土浦めぐみ教会が、どのようにこの時代を生きていくのか、どのように来たるべき未来を受けとめていけば良いのか。それを私たちにお示し下さい。

歴史を統べ治めたもう全能の父なる神のひとり子  
再び来たりたもう救い主、信仰の創始者であり完成者である主  
私たちの救い主となられた主、教会の主、わたしたちの  
主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 アーメン

●祝祷

私たちに罪の赦しを与えられた主イエス・キリストの恵み、  
私たちに戒めと教訓を与えられる父なる神のあわれみ、  
私たちを悔い改めの道へ伴われる聖霊なる神の導きが

今、神を礼拝する

一人一人の上に

豊かに限りなくありますように。アーメン